

# プラタナスの幹の太さに 半世紀の時の流れを実感して

塚本 淳逸 旧制十二期

平成三年は、われわれ旧制十二期生が母校能代中学を、昭和十六年三月に卒業して以来、五十周年に当たる年だった。過般、在郷の学友幹事の行き届いた配慮により、盛大なクラス会を催すことができた。

十月五日 土曜日 午後四時

クラス会総会に先立ち、能代市萩ノ台、白龍寺に於いて、恩師・学友物故者二八名の慰霊祭が行われた。学友花下哲夫住職の心にしみる読経と、幹事長岡幸作君が切々と胸に迫る追悼の辞を述べ、参列者一同、在りし日の恩師・学友を偲び、冥福を祈った。

同日 午後五時

会場を柳町ブラザ都に移し、総会を開催する。幹事西村全蔵君の挨拶に続いて、宮地昭君の乾杯の音頭により、懇親会に入る。

戦中戦後の混乱と激動の時代に、それぞれ的人生を歩み続けて来た私どもは、卒業以来五十年ぶりに、やっと再会を果たし、その喜びを分かち合うことができたのである。

追憶、懐旧談は尽きることなく、飲むほどに酔うほどに宴益々盛り上がり、夜のふけるのも忘れ、ついには市内ネオン街にまで繰り出して二次会、三次会を重ね、再会の喜びに浸った。

翌六日 日曜日 午前十時 ブラザ都集合

同社社長鈴木音安君の好意によるマイクロボスの提供があり、学友肩を並べて同乗、能代市内をくまなく見学する。新装なった向能代の諸施設・米代橋・能代港の変貌に一驚し、また能代高校新校舎の広大さに、あらためて母校の発展を実感した。そして旧中学校跡の文化会館訪問では、校庭跡のかすかな面影に、当時の思い出が急によみがえってきて、プラタナスの幹の太さにしみじみと五十年の年輪を感じながらもタイムカプセルで呼び戻された感慨に打たれた。正午、ブラザ都で昼食会。午後二時、互いの健康を祈り、固く手を握り再会を約し、別れを惜しみつつ散会した。



○出席者氏名○ 西村全蔵 鈴木音安 原田竹千代(以上野球部) 平泉 修 小笠原清重(以上柔道部) 長岡幸作 平沢恭次(以上体操部) 花下哲夫 境 桂樹(以上剣道部) 瀬川長次郎 渡部武治郎(以上陸上部) 宮地 昭(庭球部) 泉 勇 塚本淳逸(以上排球部) 金沢武雄 成田 博 保坂 昇(以上園芸部) 相庭 等 平塚國雄(その他) 《敬称略》



## 六十七歳に想ふ

勝永金一 旧制十三期

私は小さい頃、いはゆるおばあちゃんコだった。そのおばあちゃんが亡くなつたのが六十九歳。私は今六十七歳であり、そのおばあちゃんの年にそろそろ並びさうになつたかと思ふと、何か啞然とした気持ちになる。

旧制十三期生の同輩ももう六十七歳、みな第二の人生、悠々自適の日々を送っているものと思ひながら過ごしている。さういふ矢先、同輩の訃報に接するのは、まさに青天の霹靂、愕然として身の起き所を知らないのである。一昨年、佐藤寛君の訃報を知らされた。四月、入院わづか二週間の急死であつた。同級生の死は、実に言ひやうもなく身にこたへる。

在京十三期会は、昨年七月十九日佐藤君を偲び、東京駅前「いつみや」に集まり、故人の在り日を語り合ひ、寄せ書きなどをして一夕を過ごさうといふことになつた。ここは例年の在京十三期会の集合場所。しかし、もともと八、九人の同期生である。一人でも減るのは実に寂しい。集まれば、年を忘れ、血氣盛んな頃の話題に花咲かせ、若かりし日に逆戻りした気分になつて家路につくのが、年一回程度の在京十三期会である。今年はずいひとりも欠けることなく、元氣な顔を寄せ合ひたいものである。

昨年の出席者氏名……安井哲彦、千葉胤時、三浦友喜、工藤文一郎、鎌田義雄、石山榮一、腰山光治、勝永金一 《敬称略》

## ふりむけばはや還暦

伊藤 康隆 新制三期

能代高校第三期生（通算二期生）卒業四十年記念同期会が、昨年八月十七日、柳町プラザで開催され、同期生六七名が参集し、五人の恩師に足をお運び頂いた。

私たちは、昭和二十年四月に現在の能代市役所の所にあつた、旧淳城第一小学校の校舎に入學した。というのも、前年の二月に樽子山の校舎が全焼の憂き目にあつていたからである。校舎がどうであれ、秋田県立能代中学校に入學できた喜びは、今でも何ものにも代えがたい思い出として残っている。

しかし、その喜びも束の間、その年の八月に日本の敗戦となり、戦後の混乱期に入つたが、二三年三月十日に再建なつた新校舎に移転するまでの約三年間、その古い校舎で学んだ（勤勞奉仕し、遊んだ？）のだった。

終戦の混乱期、私たちにはいろいろな思い出がある。週五日授業制、サマータイム制、新学制実施による民主主義教育など、ミドルティーンたちには、何とも目まぐるしい体験だった。ともあれ、二三年四月秋田県立能代南高校生となり、高校生として卒業することができた。そのような中学・高校の六年間をふと振り返るとき、気持ちはまだまだ若く、何につけてもこれから磨きをかけ、ゆつくりと時間をかけてポチポチ完成をと考えていた自分たちが、なんと日ならずして、還暦を迎えようとしていることに気づき、あらためて驚くやら、氣恥ずかしげに顔を見交わすやらの一日であつた。

## 最後はお手てつないで

杉崎 孝雄 新制八期

「同期会 焼けばつくいに 火はつかず」。今日までずっと火のつきっぱなしの島豊彦・節子夫妻は別として、我々にとつて同期の北高生は所詮高嶺の花とは思いつつ、新制七期能代高校・北高校合同同期会とあれば気もそろそろ、何はおいでも行かねばなるまいと、昨年十月十八日午後六時、グラントヒル市ヶ谷会館に駆けつけた同期生十五名、北高側出席者二十名と親しく青春時代にタイムスリップする運びとなつた。

私と同様（と言っても、私と違って彼は落第したわけではないが）卒業を同じくできなかった、那須秋男航空自衛隊空將の肝煎りによる豪華な会場もさることながら、何よりも感涙に咽んだ（なに、ちよつとオーバーだつて？）まゝこの際勘弁してヨ）のが、彼女たち持ち込みの手作りガッコ。これを漬物という、久方ぶりのふるさとの味わいだつた。

これが合同同期会としては二度目。なにかと理由をつけて古い顔を寄せ集めたくなるのは、老化現象の始まりではなからうか、と多少の不安はちらつくものの「青春やよし」と、近々第三回の開催を誓い、両校校歌の斉唱のあと、男女交互にお手てつないで「線路はつづくよ、どこまでも」を合唱しながらのお開きだった。そろそろ初孫の話に目尻を下げる人もいた。高校からさらにさかのぼる小・中学時代の懐旧談も出た。しかし、いつまでも「ふるさと会飾る錦の ない集い」にはしないよう、一同発奮して、今後益々頑張りたいものである。